

国語(小)部会 理論研修会 終了報告

テーマ	『主体的・対話的で深い学びに迫るための授業づくりへのヒント』 ～物語的文章教材を通して～	
日時	令和 3年 7月 2日(金) 15時30分～16時40分	
会場	当別町立西当別小学校	
講師	青木 伸生 氏 (肩書) 筑波大学附属小学校教諭	
参加者	51名	
研修会 の 様子		本年度の理論研修会は、zoom で筑波大学附属小学校と西当別小学校を繋いで開催しました。 扱っていただいた教材は小学校3年生教材の『すがたをかえる大豆』と、小学校6年生教材の『やまなし』でした。 テーマの副題では「物語的文章教材」と銘打ちましたが、青木先生との事前打合せで、説明的文章教材も取り扱っていただけることになりました。
		『すがたをかえる大豆』では、「大豆が何種類に分けられるか」という発問から始まりました。種類から文章構造に迫っていく板書構成で、熱心にメモを取る参加者が多数いました。また、「ダイズと大豆の違い」や、接続詞に注目するなど、教員である私たちも、子どもたち同様に「なるほど」「そういう分け方もあるのか」など、感嘆の声があがっていました。 『やまなし』については、やまなしの二つの場面を絵で表現し、文章内容を理解させる、題名をつけさせる、対比を読ませるという方法が紹介されました。また、宮沢賢治の背景を知っておくとよい、ということも教えていただきました。
	学びの主体としての子どもを育てる 子どもに「問い」をもたせる (課題を自ら見出し、追求しようとする子ども) これがいちばん難しい →自ら問いをもてる子どもが育っていれば、 教師の発問は要らなくなる  University of Tsukuba 	最後に、『主体的に学ぶ子どもを育てるには…』という内容に迫っていただきました。 「板書の工夫」「発問の工夫」が必要であること、「子どもに『問い』をもたせる」ことを意識した授業づくりが心げけるなど、私たち教師への気づきを与えていただきました。 参加者アンケートからも、「すぐに授業をしたくなった」「発問に気を付けたい」「大きなヒントをもらった」等、大変満足いただけた理論研修会となりました。